修士論文のテーマを変更したらどうですか？

游　淳　然
（大学院文学研究科文化財学専攻 平成14年度修了）

三年前に別府大学を卒業し、大学院に入学して『ピカソと女性の関係について』をテーマに一年半余り研究したが、なかなか新しいオリジナルのデータが手に入らなかったために、研究が進まなかった。ある日、見かねた指導の先生から、修士論文のテーマを変更したほうがいいと言われた。

「そんなばかな。冗談は言わないでほしい」と、心から思った。十分間ぐらい呆然となった。一体何のために大学院に入学したのか、頑張る気力がなくなりそうになった。私の知る限り、こんなショックなことは聞いたことが無かった。その時、もっと早く先生の研究室に相談に通っていたらよかったのに、と後悔した。今更このテーマで論文を指導してもらえるようにお願いしても、仕方が無いと思った。その日、先生や友人たちに相談して、大学院の授業を続けるのか、改めて修士論文のテーマを変更して一からやり直すかを考えてみた。

徹夜で考えて、新しいテーマで一からやり直そうと決めた。翌日、先生の研究室へ行き、新しい論文のテーマ『大分における西洋美術史の受容』を決め、論文の書き方や研究方法を相談した。先生の助言を参考にして、一次資料を入手するために、図書館で過去の地方新聞からデータを探した。朝から晩まで、二十数年分の地方新聞と何種類もの新聞を探し、百枚余りの記事をコピーした。

三日後には、図書館の司書の方々に名前を覚えられてしまった。恐らく司書の方々から嫌がられているのではないか、と心配した。ところが、一気に何十枚もの新聞の記事のコピーを頼んでも、いつも笑顔で対応してくれた。母国の台湾の場合を考えると、これほどの大変な作業を頼んだとしたならば、親切な対応を受けることは、まずないだろう。大分県の司書たちは日本一親切な人たちだと思った。

とにかく、ほかのクラスメートたちに比べて、論文の進行は一年半くらい遅れていたため、もう時間が無いとあせりながらも、必死に図書館でデータを探し、そして美術関係者たちに聞き取り調査等をすすめていった。

ところで、留学生にとって、最も大変な作業は、集めたデータから分かった自分の考えを、綺麗な日本語で書くことである。幸い、周りの先輩たちが論文の書き方を教えてくれたり、発表する前に助けてくれたり、お互いに励まし合えるクラスメートもいて、国際交流会館の先生も、最後まで論文を直してくれた。こうしたまわりの親切な方々の存在がなかったならば、修士課程を修了することはできなかったのかもしれない。修士論文のために、その一年間は本当に辛かったけれども、それと同時に、その頃の生活は最も充実していた気がする。一年余りかかって、修士論文を提出した。

当時、先生からかなり厳しいアドバイスを受けていた時は辛い日々が続いていたけれど、先生はいつも傍で私を支えてくれた。本当に心から感謝している。私の一生の思い出になった。